

教職実践演習における学生の学び －保育のアイデア集の作成を通して－

近藤 万里子・林 恵
帝京短期大学こども教育学科

Learning of students at school teaching practice (The kindergartens) － Making the idea book about ECEC －

Mariko KONDO・Megumi HAYASHI
Department of Early Childhood education, Teikyo Junior college

Abstract

The aim of this study is to find the education methods of “ the Learning of students at school teaching practice (The kindergarten)”. We analyzed their reports in which students had written their thoughts about what they learned in this class. The students considered their experiences of practical training at a kindergarten in group interaction. And then, they became aware of the gap between their ideal images of teacher and their present self. In addition, they recognized their self-challenges.

Keywords : The Learning of students at school teaching practice, group interaction, self-challenge

要旨

本実践報告は「教職実践演習」の授業実践を通して、学生がどのような学びを得て、意識変容を行ったかを、学生の事後レポートを中心に結果をまとめ分析を行い、今後の教職実践演習の在り方を探ったものである。学生はグループ対話を行うことにより、教育実習で学んだことを自覚し、保育者としての理想像と現在の自己の状況に気づき、そこから学生は今後取り組んでいくべき自己課題の明確化に至った。

キーワード：教職実践演習、対話、自己課題

1. はじめに

教職実践演習は平成18年7月の今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)の中で教職課程の質的水準を向上させる目的で導入された。この答申では大学の学部段階の教職課程が、教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるものとなるために、大学自体の教職課程の改善・充実に向けた主体的な取組が重要であるとし、課程認定大学のすべての教員が教員養成に携わっているという自覚を持ち、各大学の教員養成に対する理念等に基づき指導を行うことにより、大学全体としての組織的な指導体制を整備することが重要であると述べた。

また、中央教育審議会は、平成24年8月に「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」の中で、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考え

る力を持った人材は、学生から見て受動的な教育の場では育成することができないため、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要であると述べた。この流れはその後、文部科学省が平成29年に公示した「新しい学習指導要領の考え方」においても、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた各学校の授業の改善、推進について記載されるに至った。

教職実践演習は教員養成課程の最終年度に実施されることから、多くの短期大学で平成23年度からスタートし、平成31年度からの保育者養成新課程においても引き続き設置されている。実施の方法は大学によってさまざまであり、多くの大学で工夫を重ねつつ、複

数の担当教員が連携しながら受け持っている。

2. 本実践報告の目的

本実践報告は帝京短期大学こども教育学科に設置された「教職実践演習」の授業実践を通して、学生の意識がどのように変容したか、学生のレポート課題を中心に振り返りをおこない、今後の教職実践演習の在り方を探ることを目的とする。

3. 本学の取り組み

1) 教職実践演習の目的と到達目標

平成 29 年度の教職実践演習はこども教育学科こども教育専攻コースの 2 年後期に実施された。42 人が履修し、全員が幼稚園免許 2 種の取得を目指している。授業の目的は①幼稚園教諭としての知識や技術等が十分に身についたかどうかを学びの最終段階として確認すること、②自己課題を明確化し、不足している知識・技能を身につけることとしている。また、授業の到達目標としては①使命感や責任感、教育的愛情について理解すること、②社会性や対人能力を身につけること、③幼児理解や学級経営について理解すること、④保育の場における指導力を身につけることとしている。

2) 授業の進め方

全 15 回の授業は表 1 のとおりに進められた。

① 第一部 保育のアイデア集

保育のアイデア集は、保育に取り入れることができる制作、ダンス、ゲーム等を写真や図解入りでまとめている（図 1. 2. 3）。企画書（図 4）を作成し、教

員のチェックを受け、アイデア集の作成を進めた。学生が選んだアイデア集のテーマは、手遊びや新聞遊び、ゲーム等多岐にわたるものであった。作成後、授業内で実際に説明、簡易的な模擬保育による発表をおこなった。



図 1 アイデア集表紙

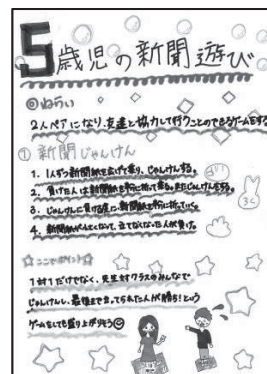


図 2 アイデア集新聞遊び



図 3 アイデア集手遊び

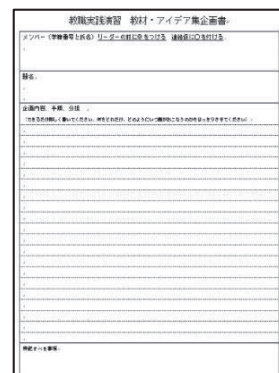


図 4 アイデア集企画書

表 1 教職実践演習 授業内容

回数	課題	内容
1-2	履修カルテの記入と振り返り	各自履修カルテの修了している授業について、記入漏れがないかを確認し、評価シートにて自己の学びの過不足をチェックする
3-4		同じような項目が未修得だと感じた学生同士でグループを作り、どのようなしたら、未修得の部分を習得できるようになるか話し合い、発表をおこなう
5	保育の Q&A 保育のアイデア集作成	保育の Q&A 作成の説明を受けグループごとに話し合う
6-8		保育の Q&A の作成
9		保育のアイデア集作成についての説明とグループ編成
10-12		保育のアイデア集の作成
13	製本	保育の Q&A とアイデア集を印刷、製本をおこなう
14-15	発表とまとめ用紙の記入	グループごとにアイデア集を基に発表をおこなう
項目に沿ったレポートを提出する		

② 第二部 保育のQ & A集の作成

平成28年度から教職実践演習において「保育のアイデア集」の作成をおこなっている。29年度は大きく2つの項目に分かれ、第一部の「保育のアイデア集」だけではなく、第二部「保育のQ & A」を加えて作

成することとした。

ここでは、学生が保育者として不足している力をどう補っていかくに焦点を当て、B.S.Bloom¹⁾の完全習得学習理論を参考に授業を計画した。完全習得理論とは、すべての学習者が学習目標を達成されるべきであ

表2 学生が感じた不足している力の項目をグループ化

保育者としてのふるまい 挨拶、笑顔、積極性（保育者に対する）、コミュニケーション力、相槌の打ち方や敬語、事務的なことの理解、体調管理、保育者としての責務と役割の理解、情報機器
教育の原理 幼稚園教育要領の理解、学校教育の社会的、制度的、経営的理解、5領域の理解 教育理念、自分の考えに合った教育方法
実技 手遊びのレパートリー、手遊び（テンポ）、歌に合わせたピアノ、ねらいにそった実践力 年齢に合わせた絵本の読み
記録 日誌の書き方（エピソード等）、語彙力と漢字力、日誌の誤字脱字
子どもへの対応 子どものトラブル対応、積極的に子どもと関わる、様々な場面における対応
支援の必要な子ども 特別支援教育、障害のある子どもの対応、障害の特性や状況に応じた対応
指導の展開① 個人と全体（全体の関わり方）、学級経営、年齢に合った進め方、集団のまとめ方、全体を見る力、声の大きさ
指導の展開② 説明する力、子どもに対する質問、声掛けや配慮の意図の理解、年齢に応じた言葉かけ、発達段階の理解、ねらいにそった実践力
指導の展開③ 指導案の書き方、保育の展開力、子どもに合わせた展開、時間配分、準備、発達段階（指導案や援助）

1. 子どもへの対応 (16pt 以下 MS明朝体) 余白は word 標準で設定

担当 163000 ○○○ 163000 ○○○ 163000 ○○○ 163000 ○○○ (10.5pt)

(1)半角 子ども全体を見ることができなくて困っています。(12ptに下線)

実習で全体を見るようにしてね、と言われていましたが、どうしても自分の目の前にいる子どもに夢中になってしまいます。どうしたらよいでしょうか。(10.5pt)

私たちの意見 (10.5ptに囲み線)

<書き方>
みんなで話し合う⇒意見をまとめる⇒わかりやすい文章で意見を書く
＝調べる

(2) 子どもたち同士のトラブルがあった時に、どう対応したらよいかわかりません。

子どもが泣きながらケンカをしている場面がありました。どうしたらよいか分からず、手が出ないように気を付けたのですが、ケンカの仲介はどのようにしたらよいのでしょうか。

私たちの意見

(3) 幼稚園教育要領が新しくなったと聞きました

授業で幼稚園教育要領が新しくなったと聞きましたが、実際まだよく理解できていません。今までの幼稚園教育要領とどのように違うのでしょうか。

私たちの意見

保育の初し者が読んで分かるQ&A集を作ると考えてください




図5 Q & A レイアウト見本

10. 学級のまとめ方

(1) 集団で活動する時、うまくまとめることができません。

好きな遊びの時、一人ひとりの子どもをよく見てよい関係を築けたように思っていたのですが、ごっこ遊びや砂遊びで人数が増えていくと子どもとの関係を築くのが困難になりました。

私たちの意見

同じ人でも個人でいるときと集団でいるときは心情に違いがあるので、個人と全体を同じものと捉えるのは間違っているのではないのでしょうか。このテーマは学級経営力につながっている課題だと思います。幼稚園教育要領の第一章、第一 幼稚園教育の基本には「教師は、幼児の主体的な活動が保証されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。(以下省略)」と記されています。つまりまず子ども一人一人を理解したうえで、学級の環境構成などにつなげていく必要があることがわかります。遊びや人数に合わせて教師も集団への介入をしかたを改善する必要があるでしょう。例えばごっこ遊びでは一つ一つの事象にかかわるのではなくる程度、子どもたち自身で泥れを作れるような距離感や環境構成があると良いでしょう。

(2) クラスで担任のようにふるまってもうまうまいきません。

実習生が前に立って担任と同じように、普段の流れに沿うように保育を行おうとしても、子どもたちの集中の方向はばらつき担任がまとめるのは程違い結果になってしまいます。

私たちの意見

学級経営をするうえで大切なことは何でしょうか。

① 安心・安全に通わせるクラスづくり。→子どもの背丈以上にものを積まないよう配慮をしましょう。怪我の元となる行動や物をよく把握しておきましょう。

図6 保育のQ & A集 学生が作成した一例

るという考えの基、学習者一人一人に適切な学習方法を行えば、学習者はその学習を完全に習得できるという学習理論である。この理論では、評価を重要視し、学習過程で評価を行い、達成できていなければ補助学習を行わせる。評価については、「教職履修カルテ」の「教職関連科目の履修状況」と「自己評価シート」を用いた。

Q & A 集作成の準備段階として「教職履修カルテ」の記入が終了したのち、自分に不足している力や苦手とする項目をあげた。学生が各自記述した項目から担当教員がキーワードを抽出、グループ化したもの(表2)を学生に示し、自分の取り組みたいグループを選んだ。選択者が多かった「保育者としての振るまい」は2つのグループで分担し、グループは概ね4、5人で構成された。学生へはレイアウトの見本(図5)を提示し、保育の初心者やこれから実習へ行く1年生が読んでわかるものを作成(図6)するよう促した。

3) 学生の振り返りの方法について

保育のアイデア集と保育のQ & Aは印刷され冊子となって学生に配布された。冊子の作成も学生自身がおこなった。保育のアイデア集をもとにした発表は録画し、学生の下承を得たのちに、URLを知っている



図7 発表動画(ゲーム)



図8 発表動画(制作)

者のみが視聴できる設定でYoutubeにアップロードした(図7、8)。学生には他者にURLを漏らさないように注意喚起を行ったうえで、レポートを書く際の参考にするよう伝えた。

レポート課題のテーマは「保育のアイデア集の実技発表に向けた取り組みやその過程で気づいたこと」「保育Q & A集について、自分のグループの取り組みから得たもの」について自由に記述することとした。

4. 方法

1) 倫理的配慮

レポート作成後に学生全員を対象に本研究への使用について、研究の目的や意義について口頭で説明し、さらに、個人は特定されずレポート作成者に不利益は生じないことを説明し、同意を得た。

2) 分析の方法

保育のアイデア集と保育のQ & Aそれぞれについて、学生のレポートの記述から文章の中核となる部分や、共通した記述事項について抜粋し、カテゴリーに分けた。

5. 結果

1) 【保育のアイデア集の実技発表に向けた取り組みやその過程で気づいたこと】

学生の記述は次の5つのカテゴリーに分けられ、主として課題の取り組みを通して得られた事項(①、②)と自分自身の変化への気づき(③、④、⑤)に分けられた。

① 実習を通した学び

・実際に実習に行ったからこそわかることもあり、自分たちのアイデアを考えていくことで子どもの発達段階や、安全面、作る前後の遊びまで自然と考える力を得ることができていたかなと思います。

・実習を経験したあとのアイデア集作成だったので、どのくらい子どもたちができるか理解した上で考えたりどこまで保育者が準備しておくかという配慮の部分を新たに学ぶことができました。

② グループ対話を通した学び

このカテゴリーは、さらに次の2つに分けられた。

②-1 他者意見の尊重

・自分と違う視点から生まれる意見があり、新たに学ぶことのできる活動になりました。

・みんな同じ経験を違う環境で行ってきているか

らこそ同じ問題であっても対処方法が変わったりするので面白いなと思いました。

・自分の意見を通すだけでなく、大人数で話し合い意見を決める時は、一歩引くことをも大事だと感じました。一歩引くことで見えてくるものもあります。また、引くことによって自分の意見を殺してしまうのではなく他人の意見と融合することが一番だと思います。

②-2 仲間との連携

・同じグループで作り方が分からない仲間がいたときに、一緒に作ることで仲間も作り方を理解する様子が見られました。

・(グループ内で) コミュニケーションがうまく取れずに作業がなかなか進みませんでした。ですが、それでは、作業が進まないの、積極的に「何を作るか」「どのように作るか」を聞いてなんとか製作を終えることが出来ました。

③ 子どもを中心とした思考

・子どもの立場に立って意見を出し合いました。
・企画を考える時どういう遊びだったら子どもたちが自主的に楽しく遊んでくれるのかを重点にして考えました。
・子どもの姿を参考にして判断をするということを改めて気づきました。

・同じ活動内容でも子どもの姿に応じて少しずつ変化していくことも学びになりました。

・今回の取り組みで自分たちの意見だけではなく子どものことを第一に考えることができたと思います。

④ 理想の保育者像の獲得

・保育者自身が子どもと一緒に楽しめる遊びかどうかという気づきを学び得ました。

・子どもと喜怒哀楽を共有できる保育者になりたいと考えています。

・私のグループはとてもチームワークが良かったため、周りに助けられながら、案を出すことが出来ました。そのことから、やはり保育者間でのチームワークや役割分担がとても重要になってくるのだなと思うことが出来ました。

⑤ 自己理解

・絵を描いたり何かを段ボールなどで作るのはあまり得意ではない私ですが、折り紙だけは好きで、製作の中でも一番得意なものだと発見することができました。

2) 【保育Q&A集について、自分のグループの取り組みから得たもの】

学生の記述は次の5つのカテゴリーに分けられ、取り組みを通して得られた事項(①, ②, ③, ④)と自分自身への変化の気づき(⑤)に分けられた。

① 学習到達度の認識

・実習だけでなく、保育の授業で必ずと言っていいほど「ねらい」について聞かれました。そもそもねらいってなんだろうねというところから分からず、過去の授業プリントを見返したら、「ねらい=保育者の願い」というのを見つけまさにその通りだと感じました。

・最初からインターネットで調べるのではなく自分達がどこまで理解をしているのかを話し合い、まとめて苦手分野をより細かく知ることから始めた。

② 主体的に考える力

・どのようにしたらよりよい保育になっていくか、子ども達にとって何が一番になってくるかなど考えることが最も大切だと思って(以下略)。

・具体的に何を学びたいのかを自分の中で明確にできていないと思い、学びたいことをもっと考える時間を増やせるようにしようと思えるようになりました。

③ 実習を通した学び

・やはり二回目の実習の時の方が具体的でしっかり意味をもったものだと思えて日誌を見返して感じました。

・ねらいは書かなくても実習ができると思っていました。しかし、まず最初にねらいを決めておかないとねらいに沿った保育ができず、実習でより深く学んだり、そこで気付けることなどを得ることができないと考えました。

④ グループ対話を通した学び

このカテゴリーは以下の4点に分類される。

④-1 他者意見の尊重

・今まで自分の考えで行動をしていたり、このやり方で合っているのか不安になっている部分もあったので、グループで話し合いをすることにより、違う考え方であったり、違う視点で見ることができたというのが、私の大きな収穫になりました。

・この活動に限らずたくさんの視点を持つということは子どもの気持ちを読み取るためにも活かすことができると思うし、何よりも広い視野を持つということは保育の現場で必要な技術だと思っています。

④-2 他者意見との類似性

・班でも似たような体験をした人もいて、どのようにしたら改善できるのか考えることができました。

④-3 他者の体験談から学ぶ

・自分自身では気付かなかつたり、注意を受けたことがないことでも、グループの誰かが気付いたことや、注意を受けたことなどを聞くことで、実習に行った際の自分の見られ方であったり、立ち位置を再確認することができました。

④-4 グループ対話について

・一人での作業ではなく苦手なものが同じ人達が集まったグループでの作業だったので、意見を出すことや、それに対しての各園で言われたこと、各々が思ったことの意見交換ができて同じことを思っていたんだという安心感と、一つのことに対して細かく話し合うことができ不明点や改善点、理解が深まりました。

・穏やかな空気作りはとても重要で、その状態でないとき萎縮し、声も発することもできなくなって、結果作業効率も悪くなってしまふ気がします。

・みんながそれぞれ考え、意見を共有する力を取得することができたと思います。

⑤理想の保育者像の獲得

・自分の保育観を大切に、それを子どもたちに照らし合わせ取り組んでいくことが大切ではないかと思った。

・できるだけそういった暖かい空気を作り出せるような人間になりたいという気持ちが湧きました。

7. 考察

結果から保育のアイデア集と保育のQ & A集作成についての学生の記述には、「実習を通した学び」「グループ対話を通した学び」「理想の保育者像の獲得と自己課題の明確化」の3つの共通する項目があることが分かった。この3項目を中心とし、授業実践を通し、どのように学生の意識が変容したのかを考察していく。

1) 実習を通した学び

学生は、保育のアイデア集の内容について、「どこまで子どもたちはできるか」等、子どもの発達を想定し考えており、それが「自然と」考えられるようになっていくことにも気づき、それには実習体験が大きく影響していると考えている。学生は実習での経験を振り

返り、照らし合わせながらアイデア集を作成したと考えられる。

大豆生田²⁾は「保育や教育の世界では、この『振り返り』という行為を『省察』という言葉で表現することがある」とし、省察の在り方として、同僚など多様な他者と自分の実践や子どもについて語り合う中で、自分一人では見えてこなかった他者の視点を獲得していくものであるとも述べており、「今まで自分の考えで行動をしていたり、このやり方で合っているのか不安になっている部分もあったので、グループで話し合いをすることにより、違う考え方であったり、違う視点で見ることができたというのが、私の大きな収穫になりました。」という記述は、グループ対話という他者との語り合いの中で実習体験を多様な視点から振り返っている学生の在り様と重なる。グループ対話を通した学びの1つに多様な視点からの実習の省察があったと考える。

2) グループ対話を通した学び

秋山³⁾⁴⁾が保育現場で行った調査では、現場が求める幼児教育の要素・要件は保育技術的なことよりも、人間性や意欲、基本的コミュニケーション能力、信頼関係を築く能力であり、養成校にはその体得が期待されているとされる。同僚と話し合い等によってコミュニケーションを取り合い、共に高め合い、支え合っていく協働的な関係を同僚性と呼び(中坪)⁵⁾、協働的な関係を築くためには、園の研修等において、3～5人のグループになり話し合いながらお互い意見を交わす活動が有効だとした。その場では、どのような意見も受容的に受け止められ、自己開示しやすいリラックスした雰囲気が必要であることを提言している。

レポートでは「穏やかな空気作りはとても重要で、その状態でないとき萎縮し、声も発することもできなくなって、結果作業効率も悪くなってしまふ」と、グループ対話自体について考える記述も見られた。また、「みんながそれぞれ考え、意見を共有する力を取得することができたと思います。」とも記述されていた。

この実践のグループの人数は4～6名程度であり、グループ対話において、学生は穏やかな雰囲気を心掛ける、自分とは異なる意見に対し、まず相手の意見を聴こうという態度を取っている。そして、自分とは違う意見を聞くことは、自分とは違う視点から得られる新たな学びであると感じている。また、「一人での作業ではなく苦手なものが同じ人達が集まったグループでの作業だったので、意見を出すことや、それに対して

の各園で言われたこと、各々が思ったことの見聞交換ができて同じことを思っていたんだという安心感」と書かれており、同じ課題を抱えた学生同士の対話は共感しやすく、自分の意見を理解してもらえるという安心感が生まれ、意見を表明しやすい環境ができたと考えられ、このような授業形態の工夫は学生に協働的な関係を築かせる上でも有効であったと考える。

3) 理想の保育者像の獲得—自己課題の明確化—

「子どもと喜怒哀楽を共有できる保育者になりたい」「自分の保育観を大切にし、それを子どもたちに照らし合わせ取り組んでいくことが大切ではないかと思った。」といった記述に見られるように、実習や本授業での取り組みの過程で、保育者としての将来を想定し、自分が目指す保育者像をより具体的にした学生もいた。本授業の目的の1つに、「自己課題を明確化し、不足している知識・技能を身につける」ことが掲げられている。保育者になることを実感として意識し、理想の保育者像を描くことが学生の目標となり、自己の課題を発見することに結びつく。自己課題とは現段階において学生が苦手と感じ習得しなければならないと考えているものである。「保育のQ & A集」作成から協働して1つの苦手課題に取り組み、解決方法を模索していった経験は、今後、学生が自己課題に取り組んでいく際にも有益に働くと考える。

8. まとめ

学生は「保育のQ & A集」「保育のアイデア集」作成における他者との対話を通して、協働性への気づきをもち、現在、自分の保育者としての状況を確認し、理想とする保育者像とのズレを認識することで課題を明確化したと考えられる。同時に学生は「保育のQ & A集」作成の過程で、これまでの学びの中で理解が不十分であった内容や対話の中で明確化された課題について、同じ苦手意識をもつ学生と共に更にグループ対話を重ね、省察し、課題解決の方法を探っている(図9)。全ての学習を完全なものを目指すBloomの考えには及ばなかったが、学生はどの時点で学習に躓いたのか等を話し合い、工夫しながら解決方法を発見し、理解が困難な内容についても習得できるという自信を得ていった。教職実践演習の授業のみで学生の学びの不足を補うことは難しいが、対話を通して自己を振り返る経験は今後、保育職に就く上で生じる問題を解決する一助となると考える。

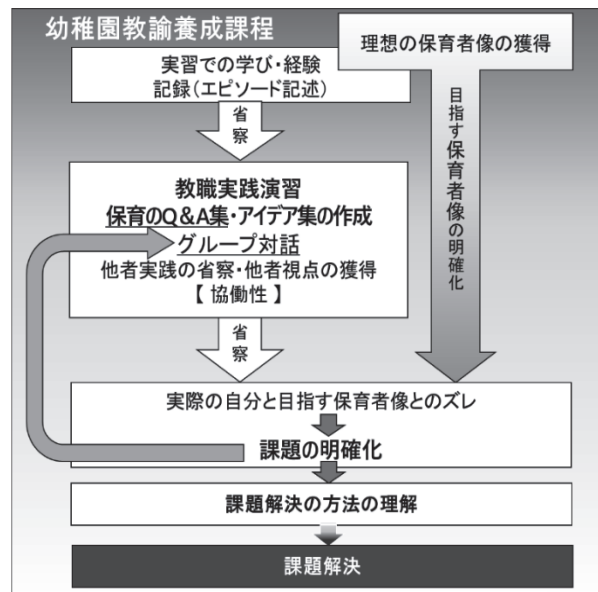


図9 本実践の内容と学生の学び

文献

- 1) B・S・Bloom (1971) Handbook on Formative and Summative Evaluation of Student Learning (B・S・ブルーム 渋谷憲一他(訳)(1973) 学習評価ハンドブック(上・下) 第一法規出版
- 2) 大豆生田(2009) 保育の質を高める体制と研修に関する一考察 関東学院大学人間環境学会紀要(11) 17-32 関東学院大学人間環境学部人間環境学会
- 3) 秋山真奈美(2013) 現場で求められる幼児教育職務実践力とは?(2):「幼児教育職務実践力尺度」を作成するための調査結果における保育所保育士と幼稚園教諭の比較 佐野短期大学研究紀要 24 45-57
- 4) 秋山真奈美(2011) 現場で求められる幼児教育職務実践力とは?: 幼児教育職務実践力尺度の作成を通して佐野短期大学研究紀要 22 129 - 141
- 5) 中坪史典,片山喜章,他(2014)特集 先生同士の「同僚性」を高める 座談会 学び合う風土をつくるために園長は何をすればよいのか? これからの幼児教育夏号 ベネッセ教育総合研究所 21-24,